

第2部

刺激間隔が一定の連続遂行課題における
行動抑制の生理心理学的検討

第1章 はじめに

第2部においては、先行研究で多く用いられてきた、刺激間隔 (ISI) が一定のCPT-AXを用い、ADHDにおける行動抑制の問題を評価する課題としてCPT-AXを用いることの妥当性を予備的に検討する。第1部において概観したように、ISIが一定のCPT-AXにおいて同年齢の健常児に比べADHD児の成績が低下することはすでに指摘されている。だが、これらの研究間では診断基準や対象の年齢構成がさまざまであり、目的もADHD児の注意の問題を評価するためというものが大半を占める。そこで、この第2部ではこれらの先行研究で示されてきている結果と、本研究において対象とするADHD児、つまりDSM-IVにおけるADHD混合型の診断を受けた子どもにおいて示される結果が一致するか、さらには行動抑制の困難という文脈で結果をとらえることでどのようなことが推察されるかを確認することを目的とする。

また、このような課題変数の考慮を行ううえで、CPT-AXの成績という行動指標にとどまらず、遂行時のERPという生理指標を用いることが行動抑制の問題を生理心理学的にとらえるために有用な指標たりうるかについても合わせて検討する。行動指標、生理指標において先行研究と同様の結果が認められ、かつその結果が行動抑制の困難さという視点で解釈が可能であれば、続く第3部においてADHD児の行動抑制の問題をよりの確にとらえるにはCPT-AXにおいてどのような課題変数の考慮を要するかについて考察を加えたい。行動抑制を評価する課題としてCPT-AXをとらえるうえで、警告刺激から次の刺激までのISIのみをランダムに変化させ、刺激出現の時間的予測を妨げることがADHD児の行動抑制の問題をよりの確にとらえられる可能性が得られれば、第3部においてこのような課題変数の改変を行ったCPT-AXを用いた検討を行うこととなる。

さらに、ADHD児が示す行動抑制の問題を改善するとされるメチルフェニデートの効果がCPT-AXの成績、ならびに遂行時のERPにどのように反映されるかについても検証し、上述した課題変数の考慮がメチルフェニデートの効果にどのように関連するかについても可能性を探りたい。このような薬物を扱った検討を行うにあたっては、保護者に承諾を得られたのち小児科医の管理のもとで実験を実施するが、日常への影響を最小限にするために多くの子どもが休薬日としている夏季休暇期間中に実施するとともに、より日常に近い状態を再現するため、服薬量の統制は行わず、日常の服薬量を用いた検討とする。